千葉大園学報（Tech. Bull. Fac. Hort. Chiba Univ.）
第38号 59-68（1986）

わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察*
——その3：遠州における継承と創造

浅野二郎・仲 隆裕・藤井英二郎
（環境植栽学研究室）

A Historicai Consideration on the Changes of the Wabicha (Tea Ceremony) and the Roji (Tea Garden)
— Part 3: The Succession and development of Oribe's Style for Tea Ceremony by Enshu

Jiro ASANO, Takahiro NAKA and Eijiro FUJII
(*Laboratory of Planting Design*)

ABSTRACT

Enshu Kobori succeeded Oribe Furuta's style for a wabicha (a tea ceremony in the special room or house for it) to recieve the quests with a tea in the hospitable settings of a room and a garden, and developed it cultivating his talent by the communicaion with several outstanding people of his salon like Shojo Shokado or a monk of Iwashimizu Hachimangu. One of the process of the development could be found in the approach from the kyakuden (a reception hall) of Takimotobo of Shojo's living house to Kanunken of a special house for a tea ceremony through the verandah, and in the design of chatatedokoro, i. e. the room for a wabicha in a shoin style. The way from the kyakuden to Kanunken through the verandah would have been supposed as the way from a soto-roji to a uchi-roji, and a set of tsukubai or a basin for washing hands beside the verandah used like a ensaki-chouzu in case of a shoincha or a tea service in a shoin. And, we can point out several effects of Shojo in the design of chatatedokoro. Therefore, the design of Takimotobo is on the way to a wabicha in a shoin style, which is completed by Enshu in the design of Bosen of Kohoan, Daitokuji.

研究の課題

前報その1（千葉大園学報第36号，1985）では，織部の茶と，これを展開した遠州の茶および茶庭について考察した．本報告では，武門の茶あるいは武家好みの茶と呼ばれる茶を推しすすめた遠州その人の辿った，茶のための造形に関する足跡を考察するひとつの手がかりとして，松花堂昭乗の滝本坊茶室・閑雲軒と茶立所を事例的に取りあげる．

小堀遠州が造園家としてはもとより，広く造形デザイナーとして高い評価を得た基盤には，彼のめぐまれた天賦の才があったこと，勿論である．けれども，その天賦の才とともに，そのすぐれた才能をさらに大きく育て，そしてみがき抜くための大きな支えとなったものに，彼をとりまくすぐれた人びとのあったことを軽視してはなるまい．それは，遠州が茶の造形の世界において存分の活躍を展開した背景に，すぐれた師・織部との出会いがあったことにも象徴的にみられる．遠州は織部の茶を継承しつつ，その規に則しながら，同時に彼独自の世界への探求，即ち，新しい創造に向けての努力を重ねる．遠州のこの継承から創造への長い道のりの中で，遠州にかかわるすぐれた人びとの〝内なるもの〟を彼はこの上ない栄養として天賦の才を育てていったといえよう．このような人びとのなかの一人に，松花堂昭乗があるとみたい．

ここでは，この昭乗とのかかわりをとらえながら，遠州の果したデザイナーとしての大きな道のり——継承から創造への軌跡をもとめる．その手がかりとして，今は失われた滝本坊の作事を取りあげる．それは，滝本坊の作事，特に滝本坊茶立所の空間構成が，遠州あるいは遠

* この研究の一部は文部省科学研究費（一般研究A：No. 59440010）の補助を受けている．

州好みの構成として，ひとつの頂点をなすものとされる評価[1][2]のゆえであり，この茶立所と茶室・閑雲軒およびその茶庭のデザインにみる発想が，やがて，遠州の傑作，大徳寺孤蓬庵の茶室・忘筌とその茶庭のデザインへ大きくつらなるものと考えられるからである．

1．小堀遠州と松花堂昭乗

男山考古録に滝本坊の茶室・閑雲軒について「寛永年中　松花堂昭乗と小堀政一相語らひて好み営れし室也」[3]としていることにも見られるように，閑雲軒の茶室と露地を考える場合，この両人の関係を抜きにしては考えられない．その意味で，閑雲軒とその露地を考察するに先立ち，ここでは，主として松花堂昭乗を軸として，遠州と昭乗とのかかわりをみる．

松花堂昭乗(天正10年(12年とも)～寛永16年；1582(1584とも)～1639)の出自は必ずしも明らかではないが，中沼家譜に示される系譜[4]によれば中沼左京の弟とされる．幼名を辰之助と呼び，長じて，近衛家に仕えたといわれる[5]．

昭乗は慶長3年(慶長6年とも)17歳(20歳とも)のとき，石清水八幡宮の神宮寺(護国寺)の男山四十八坊と総称された僧房[6]のひとつ，鐘楼坊に止住する実乗(真言宗)を頼って，奈良から京都南郊の男山に移り住む[7]．以後，寛永16年58歳で歿するまで，男山を本所として定め，世に寛永の三筆[8]といわれる書，画，あるいは詩歌そして茶をもって，上は将軍から諸大名，そして近衛家を軸とする宮廷人たちなどとの広い交流のなかで，文人としての名をほしいままにする．

この間，師実乗の法燈を襲い，鐘楼坊に止住することになる．男山考古録によれば，この坊の一角には遠州好みの茶室「筏の間」があったという．ところで，寛永3年から6年の間に，本坊[9]の滝本坊が焼亡する．やがて昭乗は寛永9年再建なった滝本坊に移り住む．寛永11年(寛永8年または9年とする説もあるが，ここでは寛永11年説をとる)，昭乗は法嗣乗淳に後を譲り，泉坊に退隠し，さらに寛永14年には，泉坊の東北の一画に方丈の一宇を建て，これを松花堂と称して，勤行三昧の生活[10]に入る．

昭乗は茶の湯を小堀遠州について習ったが，一方，書道を小堀遠州に伝授するといった間柄でもあって，遠州とはまことに親密な関係にあった[11]．さらに，中沼左京のかかわりから，姻戚の関係にあったといわれる[12]．

昭乗と遠州との最初の出会いの時期を，いま，にわかに特定することは出来ないが，少くとも，寛永3年(1626)伏見奉行小堀遠州のはからいで行われた徳川義直の伏見城茶会のために，昭乗が奔走した記録[13]，あるいは京三条における寛永5年の遠州茶会に江月と同席している記録などがあり，これらの記録から，昭乗の鐘楼坊住いの時代，既に，二人のあいだには親密な交流があったとみられる．

やがて，寛永9年滝本坊の再建のことが起り，両者の交流がいよいよ親密の度を加えていったであろうことが推測される．

ただ，滝本坊の再建工事に遠州がかかわった事実を立証するに足る確かな資料は，現在のところ，まだ発見されていない．しかし，堀口[14]や中村[15]らは滝本坊の茶室，書院などの作ゆき，あるいは遠州と昭乗，さらに江月宗玩等の関係資料等から推して，滝本坊の再建工事に遠州がかかわったとして，ほぼ間違いないものとしている．而して，本論文においても，以下に述べる諸点から推して，この推定に誤りないものと考える．

いま，小堀遠州の動向を滝本坊・閑雲軒の作事にかかわる時期に限って，諸資料から検討すれば，以下のような事柄があげられよう．まず，本光国師日記寛永9年5月2日の条に，崇伝の京都留守居　久右衛門から〝南禅寺(金地院)の泉水に4月18日，大石3つを(遠州の指示で)入れた〟とする書状が届けられたことがみえる[16]．この事に先立って，遠州は寛永8年秋から翌9年2月まで江戸表詰であったが，9年2月15日に久方振りに帰洛している[17]。この帰洛から4月18日の南禅寺の作事までのあいだに日時の隙があるのは，ひとつには遠州の疲労が込んでいたためでもあったようである．やがて，5月12日には金地院庭園が完成する[18]．

夏も過ぎた同年9月24日に遠州は昭乗の茶会に招れている．この茶会は江月宗玩を主客，遠州を次客とするものではあったが，茶入には昭乗愛用の八幡名物と称され，茶入の絶品といわれる有名な唐物茶入「国司茄子」が用いられるほどの茶会[17]であった。そのうえ，茶杓には遠州作の「玉の緒」が用いられるなど，この茶会が特に次客遠州にむけて，心を配った茶会であったことがわかり，遠州に対する昭乗の気の入れようが窺われる．

ただ，この茶会は滝本坊においてではなく，鐘楼坊でおこなわれたと考えられるものであり，茶室は遠州の好んだ，あの筏の間であったかも知れない．おそらく，この茶会では再建ちかい滝本坊の作事について，こまごまとした最後の相談がなされたのではなかったろうか．

寛永9年10月15日の茶会記には，頭書きに「滝本坊ニ而」とあり，このころようやく滝本坊の再建工事が竣工し，おそらく閑雲軒で茶会が持たれる状況になったものであろう．12月25日，昭乗は遠州伏見屋敷の夜の茶会に招かれている[20]．あるいは，この茶会では滝本坊再建工事にかかわる交々の話しに時をすごしたのかも知れな

い．翌10年6月29日には，遠州が滝本坊の茶会に招かれている．この茶会の主客は板倉周防であり，このときも，やはり茶入には国司茄子が用いられている．この茶会は朝の茶会で，閑雲軒での茶の後，書院でお振舞いがあったことをこの茶会記は書きしるしている．新装成った書院からは滝本坊書院庭園にかわる京の風景が見事なまでにとらえられていて，この庭ならぬ庭の庭趣を当日の招客たちは，新緑のきらめきの中に，心ゆくまで楽しむことが出来たはずである．この空間構成の演出こそ昭乗と遠州の合作の成果のひとつといってよいであろう．

2. 滝本坊の茶室・閑雲軒とその露地

ここにいう閑雲軒とは，松花堂昭乗が滝本坊に営んだ茶室を指す．この滝本坊は京都南郊に祀られる石清水八幡宮の社僧の住房のひとつであり，それは男山(標高およそ143 m)の北東面急斜地(滝本坊跡付近における原地形の推定平均斜度約35度)を削平して作り出した平地を巧みに利用して建てた僧房である(第1，2図参照)．

第1図　石清水八幡宮，全体図
(茶道全集巻の五より)

第2図　滝本坊とその周辺
(石清水八幡宮；史跡松花堂およびその跡発掘調査概報より)

先に述べるように，滝本坊は寛永9年の再建といわれる．このことに関し，男山考古録は，寛永年中　滝本坊焼亡[21]とあるのみで，その詳細を伝えてはいない．しかし中村は滝本坊再建の時期について考察し，この焼亡にかかわって滝本坊が再建される時期を松花堂茶会記の記事内容から推して，寛永9年[20]としている．

ここに取りあげる閑雲軒の茶室は，この寛永9年再建とされる滝本坊に付属する茶室を指す．しかし，これはやがて男山考古録などが伝えるように安永2年(1773)正月焼失する．

その後，一説によれば九条殿から玄関を拝領し，旧松坊から遠州好みの小書院を移すなどして，滝本坊が再興されたようである[23]．しかし，現在この場所は坊跡のみで，現存する建物はない(写真1参照)．

史料によれば，滝本坊は玄関に続いて松の間，花鳥の間，上段の間などからなる客殿のひと構えがあり，この客殿に続いて奥向きの4室の書院が，客殿とは少し向きを変えるようにして建つ．客殿と書院との軒合せの取り合いの部分に茶室「閑雲軒」が，書院から突き出すようにして造られている[24](第3図参照)．

この図は昭乗在世時からおよそ100年後の延享3年(1746)に滝本坊で行われた茶会の記録にかかわるものであるが，滝本坊の客殿や書院，それに茶室の情況を窺い知ることができる[25]貴重な資料である．この図によれば，客殿の北側，即ち上段の間，畳床の裏に3畳ほどの小間が設けられていて，この小間の縁先に手水鉢が据えられている．図にはこの手水鉢に添えて「遠州好」の書込みがみえる．

この手水鉢の脇には雪隠につながる幅半間(約90 cm)

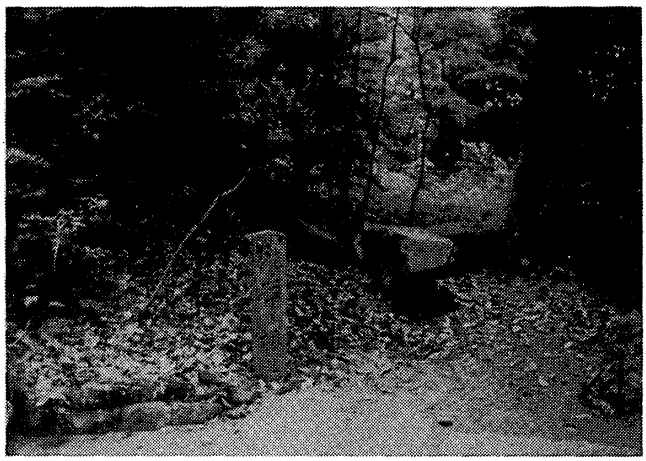
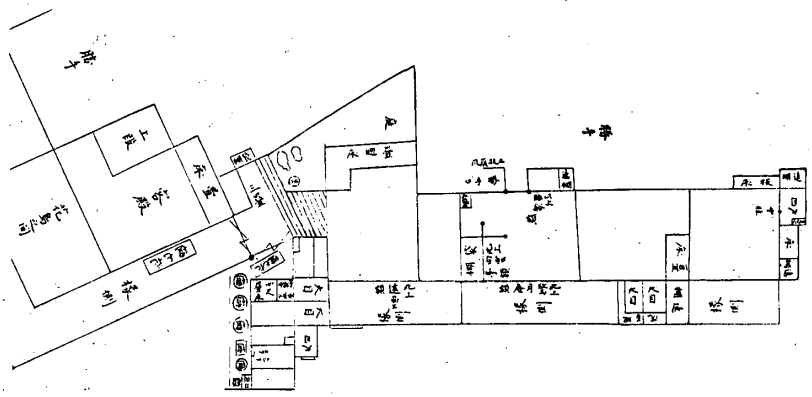


写真1　滝本坊跡の状況（昭和61年5月撮影）

第3図　延享三年茶会記図（部分）(末宗廣，茶書の研究より)



第4図　宝暦五年茶会記附図
(堀口捨己，茶室研究より)

の縁が設けられていることが図の書込みからわかる．手水鉢をはさんで縁の反対側は書院で，鳴門の間の畳廻床の床裏に当る．つまり，手水鉢のすわる空間は縁と書院で限られた小さな庭空間とみられる．この図を見ると，手水鉢を囲うようにしながら，矩折れに，前述の縁に沿うようにして延びる1本の線が描かれている．ここで，この線をどのように理解するかが問題となる．この延享の図とは別に滝本坊にかかわる宝暦5年の茶会記の附図がある(第4図参照)．この宝暦の図を見ると，この手水鉢の据わる空間は畳廻床の床裏と，客殿上段の間に北接する三畳の間の縁のつき当りからひかれる1本の線とで限られた，一見，坪庭とも見える，やや複雑な形をとるひとつの空間として描かれている．また，三畳の縁に近く，手水鉢のそばにはかなり大振りの2ケの石が配られ

ている様子が見える．ここで，先の延享の図(第3図)を見ると，矩折れに描かれた線のなかには縁沿いの狭い部分に「此間の石遠州公作」の書込みがなされている(第5図参照；これは第3図の部分図)．

堀口によれば，宝暦の茶会記に「栗之石庭　手水鉢彌婦河石之飛石　いづれも遠州公好之由」とした露地の記事が見える[26]，としている．つまり，手水鉢を据え，根府川石の飛石を打ち，グリ石を敷き込んだ平庭がそこには設けられていたことがこの記事から明らかになる．すなわち，延享の図(第5図)の矩折れに曲がる一本の線は，このグリ石が敷き込まれたおよその範囲を指し示しているものとみてよいのではないかと考える．一面に敷きつめた加茂川か那智の落ち着いた色調のグリ石の中に，明るい色調の根府川石が浮かびあがるようにして打たれた飛石，この飛石と手水鉢とが醸し出す小気味よい明快な諧調は，おそらく，作庭後100年を経た延享，宝暦当時の数寄者たちの眼をもとらえずにおかなかったのではなかろうか．その意味で，あえて図中に線描が加えられたものとみたい．さらに，この線で画された余白の部分，即ちグリ石敷きの残りの部分には，ハギなどの軽やかな植栽がなされていたかも知れない．それは，この図で茶室の手前の壁につけられた窓が「萩見乃窓」と名付けられていることなどから類推されるが，この露地の植栽については確かな資料がない．ところで，この線の意味を，もしこのように推測することが許されるとすれば，このグリ石敷きの手法は，既に別報[27]で取り上げた「本圀寺織部好み路地の図」で書院添いに展開するグリ石敷きにみた手法(第6図参照)に――たとえその規模においえは異なるにせよ――通じるものといえる．そしてそれは，遠州が既に伏見奉行屋敷の露地で試みたグリ石敷きの手法(第7図参照)であり，やがてそれは孤篷庵忘筌の露地(写真2参照)へと展開する手法にも通じるものを感じさせる手法であって，この滝本坊の作例は遠州のデザインの発展過程の中でひとつの重要な道程を示すものとみることができるのではあるまいか．

男山考古録に滝本坊閑雲軒の茶室については，前述のとおり「寛永年中，松花堂昭乗と小堀政一相語らひて好み営れし室也」とある．加えて，遠州と親交のあった大徳寺江月宗玩がこの茶室のために「臨溪」の扁額を掲げていること，さらに前述した遠州と昭乗の関係などから推して，男山考古録が誌すように，この茶室と露地の設計と施工に当って，遠州が昭乗のために力を添えた可能性は極めて高いとみて差支えあるまい．特に，この露地のデザインについては遠州の果した役割のウエイトが昭乗を超えていたとみることもあながち不当ではないと言えよう．そして，このことが後世の記録にまで「遠州好み」と特筆させたのかも知れない．

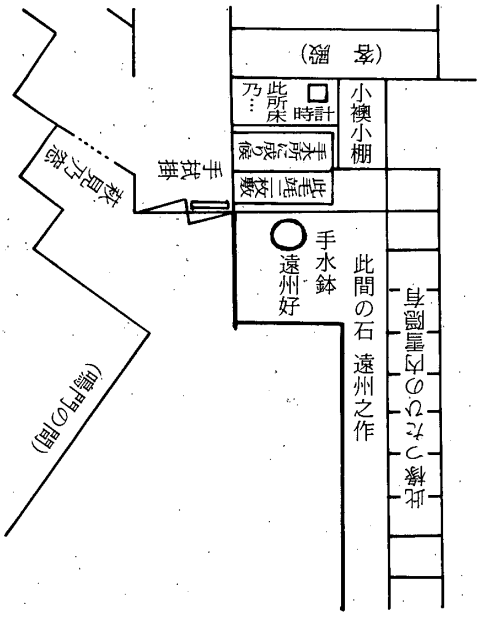
青木宗鳳が延享3年(1746)5月，滝本坊の茶会に臨んだ折の記録がある．この茶会記によると，宇治の方面が残らず見はるかせる客殿の東の縁に毛氈が敷かれ，そこを「待合」として用いた．これは昭乗歿後およそ100年あまりを経た時期のものではあるが，安永2年滝本坊焼失より17年前のもので，昭乗の営んだ寛永9年再興の滝本坊における茶会であることは確かである．

延享，宝暦当時，この滝本坊・閑雲軒で催されたこのような茶会において，席入りに先立つ手水についてみると，露地道づたいに蹲踞で手水を使うのではなく，縁と手水鉢の配置から判断して，客殿北の手水の間(三畳間とも)の北側の縁から手水を使ったものと解される．

宝暦の図で，客殿北の手水の間の北の縁には，遠州好みの手水鉢の正面にも毛氈が敷かれている様子が見える(第4図参照)．もっとも，この毛氈の敷かれた場は，手水鉢との対応関係から手水の場，即ち蹲踞構えにおける前石の意味をもつと考える立場とは別に，この場を青木宗鳳の場合における客殿東縁のように，「待合」の場として用いたと考える立場もあるであろう．ただ，本論では前者の立場をとる．

この時期の茶会の模様を誌す茶会記の一本には，また，この手水鉢の上に遠州の手らしい「関」の額がかけられ，また手水鉢の右手の縁側に「唐物之手拭掛」が置かれていたとの記事が見え[28]，これらはいずれも，この時期，縁から手水を使ったと解するための有力な証左になるものと考える．茶室・閑雲軒へは，ここから，客殿東縁に約45°の角度でつながる半間(90 cm)幅の榑縁によって導かれる．このようにして，閑雲軒の場合，待合から蹲踞そして躙口への道は，すべて縁によって繋がれるのであって，この縁が露地道の役割を担っているものと見做される．このことは，すでに前報その2(千葉大園学報第37号，1986)において指摘した金地院八窓席にみられる躙口前の榑縁の構成に通じるものといってよいであろう．

閑雲軒の躙口に通じるこの榑縁には手摺りがまわっているだけで，吹き放しである[29](第3図および写真3参照)．滝本坊は，上述するように，急斜地に建っていて，江月宗玩がこの茶室に「臨溪」の額を掲げたことに徴しても，おそらく，この茶室が谷をのぞき込むようにして建てられていたと考えられる．それだけに，この縁からは木津川を越えて，はるかに京の山々を見はるかす絶景が展開していたはずである．人びとは，この縁をつたうなかで，茶室への道すがら，この絶景を満喫したに違いない．それは手水鉢を中心とする，あの引締った露地の構成との対比によって，“見せる露地”としての際立っ



第5図　閑雲軒の露地（部分）平面図
延享三年茶会記図（部分）

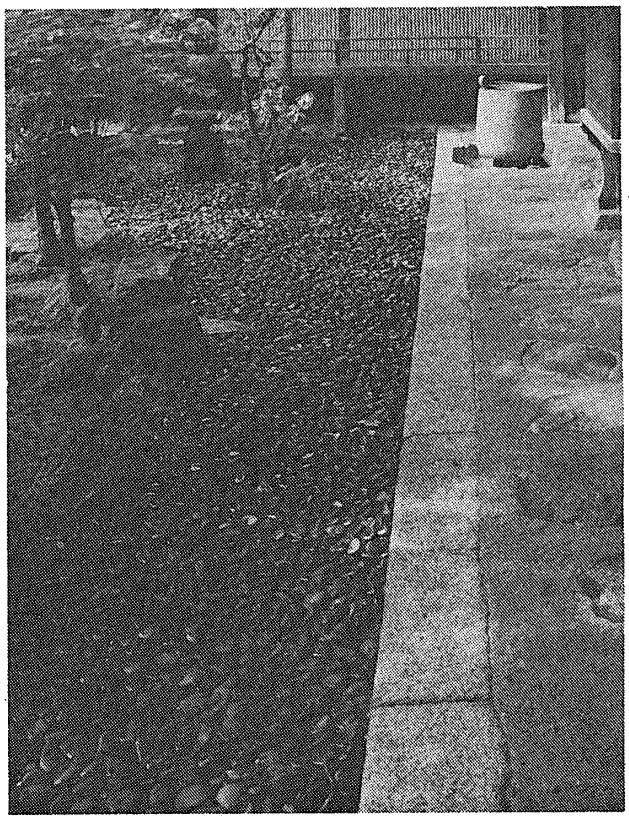
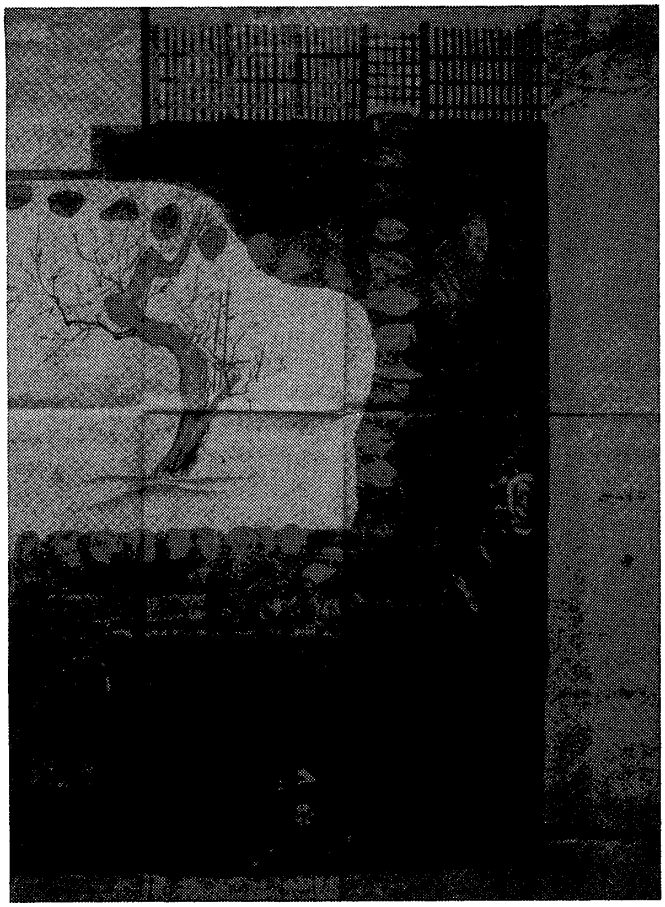
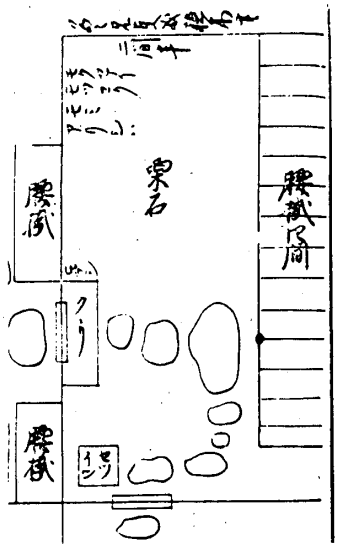


写真2　孤篷庵忘筌の露地
（中村昌生編，茶道聚錦第7巻より）



第6図　本圀寺織部好み路地の図（部分）
（東京国立博物館蔵，本圀寺(方)丈ニ有之　古田織部好庭之図より）


腰掛
腰掛
腰掛

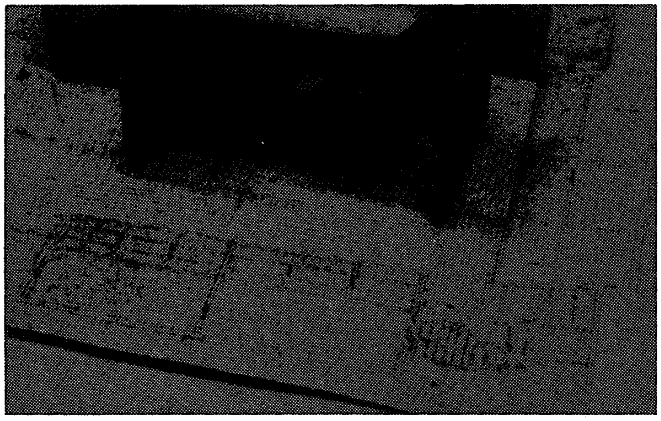


写真3　滝本坊茶室閑雲軒起し絵図（部分）
（東京国立博物館蔵）

た演出を成立させているといってよいであろう．

このようにみるとき，茶室に通じるこの縁は，遠州が金地院八窓席で試みた手法，即ち，露地の高さを茶室の床高まで引き上げ，その露地面を榑板敷きで仕上げたデザインの延長として受けとめてよいのではあるまいか．同時に，このことは昭乗の行なった滝本坊の仕事が，男山考古録の伝える，常に遠州との「相語らひ」の中ですすめられたとする記録を裏書きするものといえる．

閑雲軒は四畳大目，躙口は金地院八窓席によく似た構成で，茶室の中央に開けられ，刀掛けは躙口のあく壁面奥手に設えられている．すでに触れたように，茶室へは榑縁からにじり入るようになる．この躙口まわりの構えをみるとき，そこでは露地における席入りの所作とその基本において〝寸分違はぬ〟所作が行われるであろうことを予想させる．ただ，それらの所作が榑縁のうえで展開するという点で〝違い〟をみるだけである．いわば，それは客殿東縁についてすでに指摘したように，露地面が床高まで引きあげられたことを意味すると見做してよいであろう．

以上に述べた，茶会におけるこれらの仕方は，主として延享，宝暦期の資料に基づく仕方ではあるが，堀口が指摘するように，この茶会における諸々の仕方は大要において，昭乗在世中のそれと大きく異なるものではないといってよいであろう[30]．

宝暦5年の茶会記の付図には，茶室・閑雲軒の榑縁に丸形の毛氈が露地飛石を想わせるように布置され，特に躙口前には役石がわりの思い入れか，角形の毛氈が敷かれている様子が描かれている。このことは，この図が当時の人びとも，この茶室の廊下を，さながら露地をすすむ想い入れでとらえていたらしいことを，窺わせるものであり，その意味で，興味ぶかく，また貴重な図といえる(第4図参照)．

客殿の幅広い東縁に設けられた待合から茶室・閑雲軒の幅の狭い榑板縁への，このひとつらなりの廊下は，さながら，外露地から内露地への園路にも通じる，巧みな——というよりは，当時においては，おそらく人びとの意表をつく，思いきったデザインともいえる——空間構成の創作とみてよいであろう。またそれは，特に遠州の茶の世界において大切なものとされつつ，彫琢をうけてきた「見立て」の手法のきわ立ってすぐれた展開のひとつでもあるといえよう．

しかも，このひとつらなりの廊下を園路と見立てる新しい構成の実現は，席入り前の手水の在り方を，それまでの露地における蹲踞構えの在り方から，縁先手水の構えにみるような在り方に転換することを意味するものであって，このことはやがて書院式茶室へと展開する遠州の茶の創造への，重要な一階梯とみることができる．

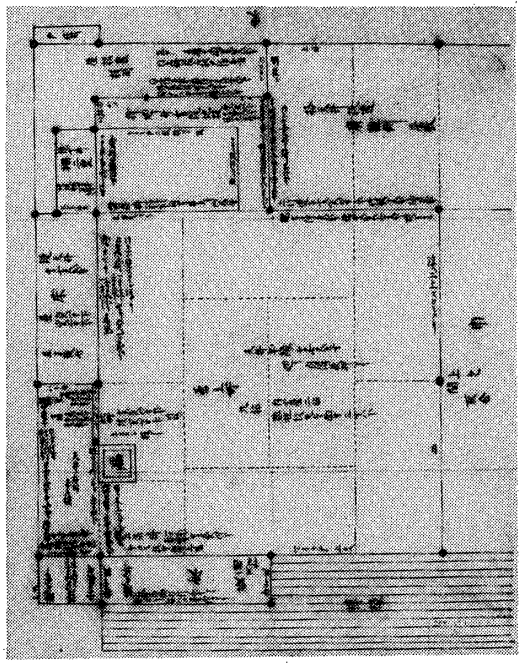
3．滝本坊茶立所

滝本坊には，既に述べたように，茶室・閑雲軒の北に接して，書院と総称される4室がつらなる(第3，4図参照)．この4室のうち，最も奥(北側)にある一室を延享，宝暦の茶会記の一書では小書院としていたが，この当時，この部屋を寺側でもこのように呼んでいたか否かは明らかでない．東京国立博物館所蔵の楽翁の起し絵図では，この小書院を「茶立所」としており，また国立国会図書館所蔵の十八囲の図では滝本坊茶立所として，その平面図を載せている(第8図参照)．

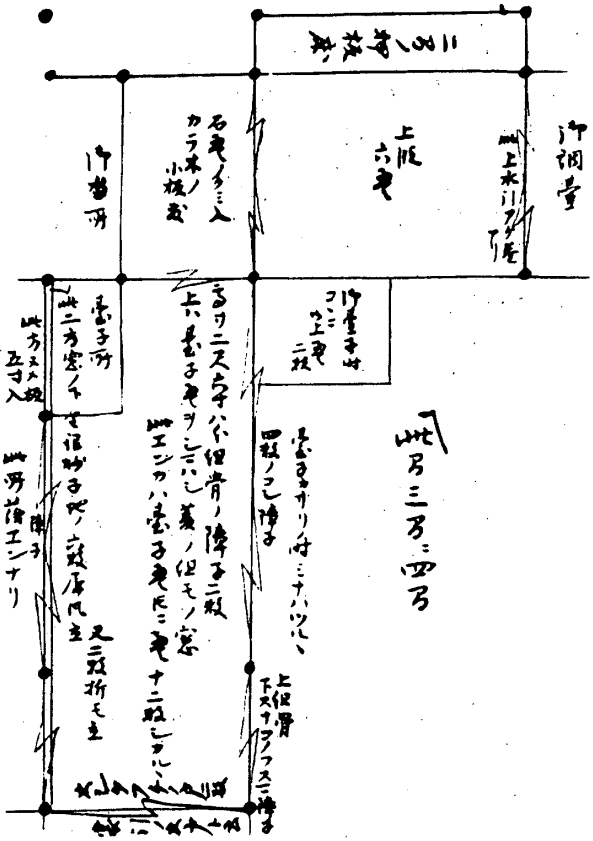
この茶立所(小書院とも)は8畳大目に，二重棚と折り廻しの付書院を持つ上段を取り付けた座敷で，中柱が立ち，1間の板床に4.5尺の畳床，それに2ケ所の違棚を持ち，畳床脇には道具畳を添えるといった複雑な構成をとっている(第8図参照)．この座敷の東側は幅1間半の畳敷きの広縁で，勾欄を取り付けただけの吹き放しになっている．

ところで，茶立所という名称についてみると，堀口によれば，桃山時代末，書院座敷に茶の湯の道具畳を添えたとき，このように呼んだらしいとしている[31]．ただ，この添え畳をなぜ茶立所と呼ぶようになったかは不明である．いま，この点についていささか考察を加えることとする．この場合，南方録にみえる東山殿の御台子所の図が参考になろう．

図には御調台と2間の押板の付いた六畳の上段と，これにつぐ3間×4間の広間がある．この左には幅1間半，長さ4間の縁があり，その下手は「裳引の大戸」で仕切られている様子が描かれている．裳引の大戸の反対側の片すみにはたたみ一畳敷きの「台子所」が設けられてい



第8図　滝本坊，茶立所，平面図
（国立国会図書館蔵；十八囲之図并大阪九昌院囲之図より）



第9図　東山殿，御台子所の図
（茶道古典全集第4巻より）

る（第9図参照）．本文には，茶を点てる「茶差配ノ人」が上段に迎えられた客のために亭主にかわって，一畳敷きの台子所で茶を点てたことが記されており[32]，それは村田珠光のわび茶創立以前における東山時代の茶の方式を誌したものとみてよい．

滝本坊・茶立所の平面構成について考える場合，第8図にみる台子所の在り方に注目したい．即ち，図中，台子所が上段付きの座敷の中に設けられるのではなく，茶を点てるための場としての台子所が一畳だけ縁に添えて設えられているのがわかる．このすがたを，第9図で茶立所と呼ぶ道具畳が〝添え畳〟のかたちをとっている点と考え併せるとき，平面形のうえで，茶を点てるスペースが客座のつくり出すスペースからはみ出すかたちをとる，という点で，この両者には一脈相通じるものが感じられる．東山殿の台子所から滝本坊の茶立所に到る経緯を確かめるためのたしかな資料はまだ求め得ないが，滝本坊にかかわるこの図は，茶立所の名称が成立する背景として，おそらくこのような台子所の名称と実体とがある種のかかわりをもって存在したであろうことを窺わせる．その意味で，茶立所の成立をたずねるための資料のひとつに茶書・南方録がある，といってよいのではあるまいか．

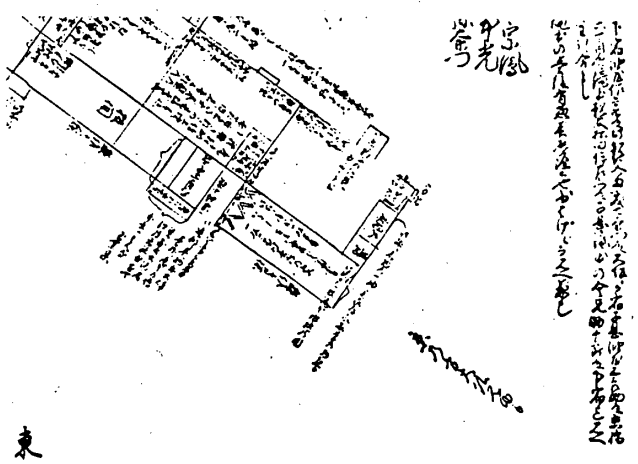
珠光から紹鷗，そして利休へとつづくわび茶の草創の時期において，これらわび茶の先達たちが求めた世界は，いうところの一座建立の世界であった．わび茶の目指す世界が，特に，小間の茶において亭主と客の差を否定する[33]ところにあったといわれる．いわば台子所にみる茶の在り方を否定したところにわび茶の出発があったといってよい．

ともあれ，茶譜には「四畳半ニ茶立所有之座シキ」の記事とその図面，四畳半大目の茶室がみられるから，茶譜の成立した時期には既に茶立所が確立していたことが知られる[34]．やがて，茶立所の名称は，このように茶を点てるために添えた道具畳の部分だけではなく，道具畳を添えた部屋自体をも茶立所と呼ぶようになり，それは，さらに江戸時代に入って，他の茶室と区別するためにこの名称が用いられるようになるとみられる[35]．

茶譜にみる如上の流れには，紹鷗，利休が草庵わび茶において目指した茶，つまり亭主と客の差の否定を目指したわび茶が，やがて時代の変遷のなかで，かつてわび茶が否定した台子所の茶の在り方，即ち，茶を点てる人

と客とのあいだに，ある種の隔りをおく茶の在り方に，むしろ，一歩近づくともいえる一面を窺うことができる．即ち，この茶立所はこのようなわび茶の新たな流れの一側面を暗示しているかに見え，同時にこの茶立所には，いわゆる書院式の茶と呼ばれる茶の在り方へと展開する崩芽がみられるといってよいのではあるまいか．

滝本坊茶立所は，このような〝茶立所〟の経緯のなかでとらえることのできる，際立って見事な書院式茶座敷の作例のひとつといえるものであり，それは，堀口や中村が認めるように，遠州のこの種の座敷構成における頂点をなす傑作のひとつといえるものである．この滝本坊茶立所は，これが小書院とも呼ばれているように，座敷構成は上段をもつ書院座敷でもあることに違いはない．この小書院を含めて，書院と総称される建物群は滝本坊・閑雲軒とともに崖に臨んで建てられている．それゆえ，この小書院に対応する書院庭園のための余地はない．しかし，遠州はこの書院のために，書院庭園に替わる見事な庭園——延享の図(第10図)でも京の方がよく見えるとの註記がなされているように，美しい京の風景を一望に納める展望——を用意した．



第10図　延享三年茶会記図（第3図の部分）

一間半幅の畳敷きの書院広縁には，立派な勾欄(高欄)が設えられ，この美しい京都の自然のたたずまいを，書院の庭として巧みに生けどっている．ここにみる手法は日本の庭園においてしばしば用いられる借景——景色を生けどる[36]——の手法の流れを汲むものといってよいと考える．

滝本坊茶立所を，堀口はその座敷構えの特色から大書院とともに，遠州伏見屋敷内の部屋，大徳寺龍光院四畳半大目茶室に通じるものとし，遠州の指図である可能性が高いものとしている[37]．大徳寺孤篷庵忘筌の天井板として著名な杉の砂ずり板がこの滝本坊書院にも随所に用いられており，また違棚や中柱の嵌め板に用いられた透し彫の図柄にも，遠州伏見屋敷に酷似するもの，あるいは，龍光院密庵席に通じるものが少からず見出されるという[38]．これらのことを通じて，おそらく，この滝本坊書院は遠州指図とみてよいものと考える．そして，ここ滝本坊における作事をとおして得たかずかずの修練が，やがて遠州にとって最も大きな成果として世に問うことになった忘筌の空間構成の中に，さらに大きく花をひらくことになる．

4　まとめにかえて

わび茶は，すべてを一碗の茶に集中することにその主眼をおいた利休の茶から，やがて，客のための茶へ，さらに茶を客のもてなしのひとつとしてとらえる書院式の茶へと展開する．わび茶のこのような流れのなかで，客のもてなしの茶のための〝場〟として，この滝本坊茶立所をとらえるとき，その空間構成は，露地あるいは書院式茶室の庭として京都の自然風景の眺望をとらえた，あの演出を含めて，まことに見事といってよい．茶室・閑雲軒のための小石敷きの露地と，園路に見立てたつたい縁，そこに展開する広びろとした眺望，この二つの空間がつくり出すコントラスト等々，空間に対する見事な演出を含めて，このすぐれた茶立所の構成とこれを基底とする空間的演出が，遠州によって成されているとするとき，滝本坊再建工事は遠州のデザイナーとしての展開を考えるうえで，極めて大きい意義をもつといわねばならない．また同時に，滝本坊でデザインするなかで，遠州とともにあった昭乗の存在，いいかえれば遠州と昭乗のこの作事を通じての出合いの意義もまた，遠州のその後のデザインにおける展開のうえで極めて大きなものがあるというべきである．

摘　要

織部において，茶室，茶庭は客のためのよりよき茶を演出するための場としてとらえる立場をとる．この織部の茶を継承し，さらに展開した遠州は茶庭(露地)のための造形を含めて，かずかずの茶の造形をものしている．しかも，その中には，後世に受けつがれ，語りつがれる，すぐれた数々の成果がある．このすぐれた成果を生み出した基盤には，彼の豊かな天賦の才があったこと勿論であるが，しかし，一方，彼を取り巻くすぐれた人びとが，彼のこのすぐれた天賦の才をさらにみがき，そして大きく育てる役割を果したことも，また軽視できないといわ

ねばならない．

本報告では，このような遠州を取り巻くすぐれた人びとの中で，特に松花堂昭乗を取りあげる．

滝本坊客殿の幅広い東縁と，これから茶室・閑雲軒の躙口へ通じる狭い榑縁と，このひとつらなりの廊下がつくり出す構成は，外露地から内露地への園路の構成に通じるものといえる．而して，この構成を，遠州が先きに金地院八窓席の躙口まえにおいて試みた手法から，さらに一歩を踏み出したデザインとみる．また，その手水構えにおいても，ここ閑雲軒においては，蹲踞構えではなく，書院における縁先手水の構えを思わせる構成をとるものであって，それは廊下を園路と見立てる手法によって，はじめて成立する構成といえる．そして，この構成は，やがて，書院茶室[39]へと展開する遠州の新しい茶の造形に向う，一階梯として大きな意義をもつ．

また，滝本坊茶立所の室内構成をみるとき，そこには遠州伏見屋敷におけるデザインからの発展といえるかずかずの特徴がみられる．

さらに，この滝本坊茶立所における作事のかずかずの体験が，やがて，遠州の造形デザインの世界を，さらに大きく発展させる貴重な契機となったであろうことが推測される．

而して，このような視点に立つとき，遠州と昭乗のこの作事における出会いが，デザイナー遠州にとって，大きな意義をもつものであったことが指摘できる．

引用および参考文献

1) 堀口捨己，1969，茶室研究，東京，鹿島研究所出版会，433
2) 中村昌生，1971，茶室の研究，東京，墨水書房，486
3) 石清水八幡宮社務所編，1960，男山考古録；石清水八幡宮史料叢書第一巻，京都，八幡町，301，(以下「男山考古録」と略記)
4) 中沼家譜・巻子本，八幡市立資料館蔵
5) 佐藤虎雄，1936，松花堂昭乗，茶道全集巻の五，大阪，創元社，403
6) 石清水八幡宮，1984，史跡松花堂およびその跡発掘調査概報，京都，石清水八幡宮，2
7) 松花堂上人行状記，茶道全集巻の五，大阪，創元社，665-677
8) 柴田實，1977，塊記，茶道古典全集第5巻，京都，淡交社，480
9) 堀口捨己，前出，479-480
10) 「男山考古録」，307
11) 森蘊，1974，小堀遠州，創元社，大阪，52-53
12) 同上，52-53
13) 渡辺良次郎，1965，光悦・松花堂・宗和・予楽院，図説茶道大系第七巻，東京，角川書店，93-94
14) 堀口捨己，前出，398-493
15) 中村昌生，前出，481-486
16) 副島種経校訂，1971，新訂本光国師日記第七，東京，K.K. 群書類従完成会，246
17) 同上，227
18) 同上，252
19) 松花堂茶会記，茶道全集巻の五，680
20) 寛永九年遠江茶之湯道具置合之留，茶道全集巻の三，684
21) 「男山考古録」，301
22) 中村昌生，前出，482および494-495
23) 「男山考古録」，300
24) 末宗廣，1981，瀧本坊數寄屋圖に就いて，茶書の研究・末宗廣著作集Ⅰ，京都，思文閣，180-181
25) 堀口捨己，前出，418
26) 同上，438
27) 浅野二郎・仲 隆裕・安藤俊比古・藤井英二郎，1986，茶庭における植栽の変遷に関する史的考察，造園雑誌49巻5号，61-66
28) 堀口捨己，前出，439
29) 同上，442
30) 同上，436-437
31) 同上，429
32) 久松真一，1977，南方録，茶道古典全集第4巻，淡交社，224
33) 熊倉功夫，1977，茶の湯・教育社歴史新書〈日本史〉81，東京，K.K. 教育社，67
34) 茶譜(内閣文庫本)四巻茶湯
35) 堀口捨己，前出，429および485
36) 伊藤ていじ，1965，古都のデザイン　借景と坪庭，淡交新社，116
37) 堀口捨己，前出，437
38) 同上，430-433および286
39) 中村昌生，1981，茶室と露地(ブック・オブ・ブックス　日本の美術19)，東京，小学館，214